



さて、今回このリサイクル通信に挿入した光の写真、なんだかお分かりになりますか？ 夜空に漂う未確認飛行物体ではありません。夕闇の川面に舞う蛍の光です。二つの光はたぶん雄と雌の蛍だと思われます。一匹が川面を飛んでいると、もう一匹が胡桃の小枝の陰から飛び立ち、川面の蛍に急接近。戯れるような飛び方を繰り返した後、二匹とも川岸の木陰に吸い込まれていきました。真夏の夜の何とも妖艶な光の舞いでした。

・ ・ 生物多様性について ・ ・

前述の蛍に関連して、もう少し書こうと思います。実はこの蛍の飛んでいる川岸は、山から小さな堀が流れ込んでいる小さな溜り池があるところです。昔は、と言っても、昭和40年代の頃までのことですが、この季節になると、無数の蛍が川沿いに飛びかっていた。子供たちは、箒と虫籠をもって、蛍が眠りにつく夜の9時過ぎまで、この小さな光を追いかけてきました。山からの清水が流れ込んでいるところは源氏蛍が舞い、川から離れた田んぼの上では平家蛍が無数に舞っていました。やがて田んぼは国道となり、また人々の暮らしが豊かになるにつれて、川の汚れが進みました。清流にしか棲息しないハゼの一種である「カジカ」は姿を消しました。やがて蛍の餌となるカワニラの姿もみかけなくなり、それにつれて蛍の数も減少していきました。今では、川岸に清水が注ぎ込む、先ほどの溜り池のところに、僅かに生息するまでになってしまいました。やがて、この蛍も姿を消すことになるかもしれません。

ここまで書いてきて、生物多様性について考えてみたくなりました。ところで、日本で話題性のある絶滅品種といえば、佐渡の朱鷺です。最近、飼育していた数羽の朱鷺がテンに殺されてしまったとの悲しいニュースに心を痛めた方も多いかも

しれません。しかしこの種の問題を考える場合、実は、もっと私たちの身近なところに目を向けてはどうでしょうか。たしかに、朱鷺の話は、絶滅品種という象徴性故に、人々の関心が高いのも事実です。しかし、実は、私たちの周りに個体数が確実に減少している生き物がたくさんいることに気づくはず。例えば、この間、テレビで最近スズメが少なくなっていると報じていました。「え！スズメが・・・！」と思いましたが、改めて家の周囲を見てみると、確かに、以前には必ず巣を拵えていた場所にもその痕跡はなく、また軒先にやって来るスズメの数も少なくなっていることに気づかされました。スズメといえば、人の住む場所には必ずいて、人間が一番慣れ親しんできた野鳥です。このように、話題を身近なところで見つけると、生物多様性の問題意識を深める足がかりになります。私達を取り巻く自然環境を改めて眺めてみてください。以前はたくさんいたのに、いつの間にか姿を見かけなくなってしまった、あるいは、たまにしか見かけなくなった生き物に気がつくのではないのでしょうか。「(爬虫類など)嫌いな生き物なので、最近はいなくなってよかったわ。」などと言ってはいただけません。

では、なぜ、今、生物多様性が叫ばれるようになったのでしょうか。それは、人類の誕生プロセスを考えれば納得できます。地球の誕生から長い年月をかけて原始生物が現れ、やがて高等生物へと進化し、種と個体数を拡大し、その最終段階で人間という種が出現しました。今、現在進行し始めた種や個体数の減少プロセスは、人類が生まれたプロセスを正のプロセスとすれば、負のプロセスの始まりを暗示させるからです。悠久の時間を費やして生まれた種が、あっと言う間に姿を消してしまうという事実・・・、何か空恐ろしさを感じませんか？このように考えると、地球環境のなかで育まれた生物の多様性は、人間も含めた生き物のマクロ的最適界？とも言えます。そしてこれを維持していくことが、実は、人類の生存・維持を保障することに繋がると、人々が気づき始めたところに、生物多様性の考えが生まれたのです。

人類の豊かさへの希求が、その一方で、地球環境の破壊を通じて、種を消滅させ、個体数を減少せしめ、生物多様性という生き物全体の最適秩序を壊して始めています。やがて災いは人間に降りかかる・・・。何やら予言めいていますが、シグナルは身近なところにあります。五感を研ぎ澄ませ、皮膚感覚で理解することが大切です。